



非文字資料研究センター 新刊のご紹介

非文字資料研究 28 号



●2024 年 3 月 20 日刊行

●内容

戦前期日本のポスター製作における写真との関係

——その存在と影響を中心にして——

田島奈都子

酒蔵行事と蔵元家の年中行事との交錯

——蔵人に向けられた感謝と継続的就労への期待を手掛かりとして——

丹羽英二

「劇場通り」を再考する

——長野県須坂市「須坂劇場」をめぐるテキストと語りから——

廣瀬由子

2021 年度 奨励研究 成果論文

華北農村の「香頭」及び「看香」

——武高庄村を中心に——

王海翠

2022 年度 奨励研究 成果論文

明治天皇の行幸を迎えた「行幸御殿」の使用法について

池田直也

清末中国人留学生在刊行した雑誌における図版を読む

——人物の図版を中心に——

郭夢堯

旧前田家鎌倉別邸の暖炉廻りの構成に関する研究

——近代住宅の室内意匠に関する一考察——

茶谷亜矢

金秀やオ族自治県大瑤山における石碑の伝承

——門頭村を事例に——

朴美子

具象化する「中国」

——日本国立民族学博物館における中国民具の調査・蒐集・展示——

余璋

編集後記

今号は約 80 頁のボリュームとなりました。私は 10 年以上編集にかかわっていますが、史上最も頁数の多い、レターとはもはや言えない(?) ニューズレターとなったように思います。このような号になったのもひとえに、研究班を中心とした活動の豊かさによるものであり、研究会報告をはじめ、フィールドワークから生まれた調査報告、招聘・派遣研究員の個性が光るレポートなど、多様な報告が寄せられました。そのなかで資料紹介も貴重なパートであり、先日公開された『非文字資料研究叢書 4 首里城と沖縄神社 資料に見る近代の変遷』について、解題や資料分析など、二つの重要な論考が掲載されたことを挙げたいと思います。ぜひご注目ください。

現在研究班は、準備班「中国の生活・文化と身体表現」も含めると 11 班を数え、過去の非文字資料研究を土台としつつも、新たな視点・対象となる資料を模索している段階に至っていると言えます。「非文字資料を問い直す」という理論班も存在しており、20 年を超えた本研究所が進むべき道、もう少し正確に言えば、進むべき様々な道をたどる試みも始まっています。ニューズレターはそうした実験も示す場であり続けたいと考えております。ご期待ください。

(熊谷謙介)

表紙紹介

都市はその起源や機能に由来して位置づけられることがあり、横浜が港ヨコハマと表現されるのは今更言うまでもない。横浜をはじめとする港町には、ぜひ港(水上)から出掛けることをお勧めしたい。個人的な経験として、かつて瀬戸内海の潮待ちの港であった鞆の浦に船で向かったことがある。陸上から入るよりも、鞆の浦の往時に思いを馳せることができた気がする。また、日本国際地図学会(現在の日本地図学会)で乗船機会を得て、横浜にも船で入った経験がある。横浜には何度も訪れていたが、それでも船上から横浜を眺めた際にはずいぶん気分が高揚したことを思い出す。

写真は、海とみなとの運河研究班でのクルーズの終盤、横浜港の海上から撮影したものである。横浜港の目印として知られてきたのは、昭和初期に外国船員がトランプのカードに見立てたと言われる、いわゆる横浜三塔(横浜開港記念会館、横浜税関、神奈川県庁)である。現代は、インターコンチネンタルホテルからランドマークタワーまでのスカイラインや観覧車がその役割を果たしていよう。横浜は景観政策の先駆的な自治体であり、港の景観は政策的に整備されてきた側面がある。他方、舳(はしけ)が行き来し、水上生活者もみられた労働空間としての港町の歴史も忘れてはならない。

(山口太郎)